



Title	上古・中古漢語における完了・パーフェクト相の表現形式の変遷 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, 大輔
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12514号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/65745">http://hdl.handle.net/2115/65745</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Daisuke_Yamada_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 山 田 大 輔

## 学位論文題名

上古・中古漢語における完了・パーフェクト相の表現形式の変遷

本論文は、上古漢語（春秋戦国・前漢）から中古漢語（後漢・魏晉南北朝）にかけて、〈完了相(perfective)〉、〈パーフェクト相(perfect)〉といった広義の完了アスペクトを表していた形式について、共時的な意味機能を分析し、その通時的な変遷を明らかにすることを意図したものである。主要な言語資料として、上古漢語では『左伝』『国語』『論語』『孟子』『韓非子』『呂氏春秋』『戦国策』『戦国縦横家書』および睡虎地秦簡（以上春秋戦国）と『史記』（前漢）を、中古漢語では『世説新語』『搜神記』『顔氏家訓』および中古期に成立した各種の早期漢訳仏典を用いて研究を行っている。

第1章では、本論文の目的を述べた上で、「アスペクト」「完了相」「パーフェクト相」といった本論文全体に関わる重要な言語学的概念についての説明と定義とを行っている。ついで、本論文が、上中古間における漢語の〈完了相〉〈パーフェクト相〉の表現形式の変遷を、「文末の“矣”」、「アスペクト副詞“既”“已”」及び「“VP+完了動詞”」の諸形式に着目しつつ記述していく構成をとることを述べる。

第2章では、まず上古における文末の“矣”の文法機能を明らかにすることを試みている。近年有力になりつつある、“矣”が〈パーフェクト相〉を表す機能を有するとする劉承慧（2007）らの説を検討し、“矣”が『左伝』等の上古文献の地の文において、出来事を発生順とは逆の順序で提示する「逆順提示」が行われる際に、先行する出来事を表す文の末尾に生起すること、“矣”がこのようなタクシスの機能を有するということは、この機能語が〈パーフェクト相〉を表す機能を備えていることを窺わせるものであると主張し、劉承慧（2007）の説を独自の方法により検証している。また、『左伝』等の上古文献の発話文における“矣”の用例についても検討を加え、Comrie（1976）の提示するパーフェクトの四類型に当てはまる用例が常見されることを確認し、地の文・発話文のいずれの用例からも、上古の“矣”には〈パーフェクト相〉を表す機能があったと考えられるとしている。

この章では、以上のように上古の“矣”が〈パーフェクト相〉を表す機能があったとの認識に基づき、上中古間における〈パーフェクト相〉を担う形式の変遷を論じている。『世説新語』『搜神記』『顔氏家訓』といった中古文献に対する悉皆調査により、テキストにおいて出来事の逆順提示を担う形式を調査し、上古では“矣”によって担われていたものが、中古では主としてアスペクト副詞“已”によって担われていることを明らかにした上で、このことは、〈パーフェクト相〉を表す機能が“矣”からアスペクト副詞“已”に継承されたことを示すものであると主張する。同時に、上古から中古に至る間に“矣”が大幅に減少しているが、このことは〈パーフェクト相〉を表す機能が“矣”からアスペクト副詞“已”へ移行したことも一因なのではないかと推定している。

第3章では、完了アスペクトに関わる副詞“既”“已”に焦点をあてている。まず、上古漢語の“既”

“已”が〈完了相〉を表す機能を備えんとする Meisterernst (2005) の説について、上古文献の実例に基づきながら再検討を行っている。“既”“已”のタクシスの機能に着目し、これらの副詞が生起すると、当該の文の表す出来事が発生した後、後続文の表す出来事が継起的に発生したという解釈に限定される——前後二つの文が無標であれば、二文の表す出来事が同時に発生したことを表す場合もあり得る——ことを指摘する。この現象に基づき、“既”“已”はいずれも〈完了相〉を表す機能があるが、純粹に〈完了相〉のみを表すのではなく、「事態が終了／完成してから一定の期間が経過していること」を表すものであると考える。さらに他の副詞との共起関係などを考慮すると、“既”は厳密には「事態が終了／完成してから長期間が経過していること」までを表すものであり（[+完了][+経過][+長期間]）、“已”は「事態が終了／完成してから一定の期間が経過していること」を表すが、経過時間の長さには非関与的なものである（[+完了][+経過][±長期間]）と主張している。

この章では、さらに“既”と“已”の上中古間における通時的変遷についても論じている。“既”が上古のうちの戦国期に減少したことは先行研究で指摘されていたが、実は上古末期の漢代に再び増加し、上古末期から中古にかけて“既”と“已”とが並存していることを明らかにする。そして“既”が増加した時期と、“已”が“矣”の〈パーフェクト相〉表示機能を継承した時期とがほぼ重なることに注目し、“已”が〈完了相〉と〈パーフェクト相〉のいずれも表すようになった漢代に、“已”の機能負担の軽減を動機として、その機能の一部が“既”に分担されるようになった結果、“既”が増加したのではないかと推定している。そして、この増加した“既”は、〈完了相〉[継起]（当該の文の表す事態が終了／完成した後続文の表す事態が継起的に生ずることを示す用法）に用いられたものが中心であり、中古では“既”は〈完了相〉[継起]、“已”は〈完了相〉[非継起]（後続文の表す事態との関連性を欠き、当該の文の表す事態が終了／完成していることのみを表す用法）および〈パーフェクト相〉、という機能分担がみられると述べている。さらに“既”の用法を詳細に調査し、中古には〈定着した性質〉を表すとも言うべき用法が増加しており、この用法を介してアスペクト副詞“既”が〈前提条件〉や〈累加〉を表す関連副詞へと拡張していったのではないかと推定する。

第4章では、アスペクト副詞“既”と“VP+完了動詞（畢/竟/訖/已）”の通時的関係について考察している。先行研究では中古初頭の後漢期の口語では、アスペクト副詞“既”は衰退しており、中古の〈完了相〉の主要な表現形式は、漢訳仏典では“VP+已”、非漢訳仏典では“VP+畢/竟/訖”となっていたとされている。これに対して本論文は、口語性の強い近古の唐五代の敦煌変文においても“既”が頻出していること、“既”が〈完了相〉[継起]と〈定着した性質〉の表現を担い、関連副詞としても用いられるという中古に生じた状況を維持していることから、“既”は一貫して口語から衰退していなかったと主張する。そして中古後期の南北朝期の漢訳仏典で“既”と“VP+已”が同時に増加しているのは、翻訳の厳密化と翻訳文体の成立に伴い、原典言語の絶対分詞等の語尾を訳出しようとする傾向が強まった結果、翻訳形式である“VP+已”が増加したが、これは口語では衰退していたため、口語で常用されていた機能の類似する副詞“既”を付加することが行われたのではないかと仮説を提出している。

第5章では、前章までの内容を総括し、上古から中古にかけての時期に、〈完了相〉〈パーフェクト相〉が如何なる形式によって表現されてきたのかを整理して、本論文の結論として提示する。さらに、本論文では十分に論じきれなかった近古以降の〈完了相〉〈パーフェクト相〉の表現体系の変遷について、現段階での見通しを示している。